



# 雨季へ



D Vの問題を抱える麗子。  
サングラスで「アザ」を隠  
し、順次を迎えた...

choji



「車、買ったんです」

という順次の言葉に、麗子は「はっ」と緊張が、走るのを覚えた。

「乗ってくれますよね？」

「ええ、そうねえ」

麗子は、くちごもった。

サンドイッチにティー、フルーツという昼食を済ませたすぐ後の、電話だった。

しばらく前に、

「今、免許をとりにいってるんです。車、買ったら一番に乗ってくださいね」

「あら、あたしでいいの？」

そう、軽口で答えたのを思い返した。

順次は、長女の由真の家庭教師である。

小学校三年の由真は、大手進学塾の「プレ・スクール」に通わせている。

「家庭教師もつけよう」

と言いだしたのは夫である。

義姉（アネ）に頼んで紹介された「順次」に、いっぺんで惚れ込んだのも、夫である。

義姉の長男の後輩で、名門の国立大学に「現役」で合格した秀才。

その肩書きが気に入ったのだろう。

すぐその日に、採用を決めた。



麗子には、まだ18歳の「順次」が「子供っぽく」見え、頼りなく思えたのだが。

順次は「優秀」な家庭教師だった。

由真の信頼もすぐに勝ち取ってしまった。

「軽ですけど、新車なんですよ」

「新車なの？すごいわ」

「・・・塾の講師もやっていますし。けっこう稼ぐんですよ。可愛い車です」

順次は、たたみかけるように、

「今から、お迎えにいきます」

そう言った。

「え？これからすぐに？」

麗子は「戸惑い」を覚えた。

「初めて乗せるのに、ガールフレンドでも誘ったら？」

「・・・約束したじゃないですか」

「・・・」

言葉に、つまった。

「何か、ご都合があるんですか？」

順次の明るい声が、少し曇った。

黙ってしまった麗子に、不安を感じたらしい。

その気配に、針で心を刺されるような痛みを感じた。

「・・・特別の用はないけれど」

そう麗子は、答えていた。

「それなら、いいでしょう？今日は由真ちゃんを見る日だから、それまで」

「そうねえ。由真が帰ってくるまでなら」

「・・・じゃあ、はりきって出発しますね」

順次の弾むような声が、耳にひびいた。

受話器を置いた麗子は、右手の中指で、額を押えた。

麗子は、他のボーイフレンドも持たずに、お嬢さん学校在学中、半分「お見合い」のようにして紹介された今の夫と「結婚生活」にはいつてしまった。

ろくにデートの経験も持たぬ麗子に、心の「動揺」があった。

・・・けれど、湧いてくる「心のたぎり」もあった。

「仲の良い弟の車に乗ってあげる」

そう思えばいいわ。

と、麗子は、心を納得させた。

順次の住む横須賀からなら、麗子の「磯子台」の家までは、小一時間はかかるだろう。

麗子は、ドレッサーの前に座った。

(第一章に続く)

## 第一章 赤い目 (1)

---

「あ！ショートケーキみたいですね」

と、透明なセロファンで包まれた一輪の赤バラを、麗子に渡しながらか、順次は、少し照れたようにいった。

アイシャドーもルージュも、いつもより濃い目に引いた。  
順次の「言葉」は、そのせいだったろう。

「厚化粧しちゃった」

「とっても華やかですよ」

「ふふ。ほめてくれたの？」

わずかな微笑で答えた。

麗子は、「年上の女」として、余裕をもってふるまいたかった。

花を一輪差しに活けた。

玄関に立ったままにいる順次に、

「お花、ありがとう。お茶でも飲む？」

そう声をかけた。

「・・・」

順次は、部屋にあがってこなかった。

「そうね」

麗子は、うなずいた。

「車に、のせてもらいましょうね」

順次の表情が、陽がさしたように明るく、輝いた。

「若い人はいいな」

と、思った。

## 第一章 赤い目 (2)

---

麗子が使っている車は赤のBMW320である。

夫のベンツと比較すると、小柄なスポーツ・セダンだが、玄関先に置かれた「空色」のキャロルは、おもちゃの車のように可愛かった。

「けっこう性能いいんですよ」

順次は、車を眺めている、麗子に言って助手席のドアを開けた。

麗子はできるかぎり「優美」に見えるように「気」を使って、車に乗り込んだ。

皮革シートのドイツ車とは違う、新車の香気が漂っていた。

重厚で少し「陰鬱」な高級車とは違う明るい内装が、麗子の心を浮き立たせた。

「中は案外ひろいのね」

「ええ」

ステアリングを握った順次が、生返事をした。

「ご自慢の車」

を、「別の車」と比較されたと思ったのかしら？

「『案外広い』なんて、悪いこと言ったかな？」

そんな風に思って、順次の横顔を、ちらっと見た。

順次は、少し口をとがらせている。

「気を悪くした」

わけではなさそうだった。

ただ慣れぬ運転に、気持ちを集中しているだけのようだった。



## 第一章 赤い目 (3)

---

キャロルは、根岸を抜け、「海岸通り」にはいった。

麗子は「その名称」が好きだった。

横浜で一番「落ち着いた」雰囲気なたたえている「通り」でもある。

「ねえ。先生、ここ海岸なんて見えないのに、なんで海岸通りっていうのかしら？」

「左側にビルが並んでるでしょう？」

「ええ」

「あれをとっぱらうとすぐに海岸が見えるんですよ。昔は海岸のすぐそばの道だったんでしょう」

「そうなの」

麗子は、18歳の順次に、少し甘える気分が生まれている自分を感じた。

## 第一章 赤い目 (4)

---

車は、大棧橋埠頭の駐車場にはいった。

横浜港を代表するこの棧橋は、2002年に改修を終えて、近代的な国際航路の就航する近代的バースとなっている。

ナホトカ航路の定期船が無くなって以来、今では、バースに船のいないことが多い。

今日も停泊している船はなかった。

麗子と順次は、埠頭ビルの屋上にあがっていった。

土曜日・日曜日には、観光スポットとしてにぎわうが、平日の、しかも雨模様のこんな日には、人影もまばらだった。

二人は港を見回すことの出来る、船のデッキをイメージした屋上をゆっくりと歩いて行った。

雨を含んだ重い潮風を受けているのに、麗子は甘やかな気分に包まれていく、自分を感じていた。

自分を護る「女の本能」が、麗子を少し、不安定な気分にさせた。

順次も、ひどく無口だった。

カモメが低く飛んだ。

## 第一章 赤い目 (5)

---

屋上を半周して、順次は、足をとめた。  
木製の手すりに手をかけて海を見た。

麗子も、自然その横に並ぶようなカタチになった。  
並んでみると、順次は「ずいぶんと背が高いのだな」と、改めて思い知らされた。

「とてもきれいな場所ね」  
そう、麗子の方から話しかけた。

「名所なのに」  
順次の、たかいところにある顔が、麗子の方を向いた。  
「はじめてなんですか？」  
「・・・いやね。横浜に住んでいるのに」

麗子は視線をはずして、海の方を見た。

隣の埠頭が遠くに見える。

霧にかすんで、マリンタワーが見えた。  
その近くに、大きな「客船」が繫留されている。

「あら、あの船なんというのかしら？」  
「え？」  
順次が、ひどく意外そうな声を出した。  
「やだわ。有名なのね」

「・・・家にばかりとじこもっているからです」

順次が、半分叱るように、半分いとおしむように言った。

「マリントワーにもものぼっていない？」

「・・・のぼったわ」

「小学生の時」

「・・・」

「あたりでしょう？」

「意地が悪いのね」

「氷川丸ですよ」

「あ」

麗子も「その名」なら、よく知っている。

「レストランもあるんですよ」

順次は、海の方を見たまま言った。

「由真ちゃんも、まだ小さいのに『受験勉強』ばかりじゃかわいそうだ。ご家族で食事でもいかれたらいい」

順次の「せいっぱい」の強がりのように聞こえた。

麗子の心の中に、年長の女の、「余裕」のようなものが、かすかに生まれた。

## 第一章 赤い目（6）

---

「・・・誰かとそこで、デートした？」

「いえ。ファミリー向け、観光客向けの場所ですから」

順次は生真面目に答えた。

「じゃ。デートは他の場所？」

「二人きりのデートって、最近あまりしないんです」

「・・・もてるでしょうに」

「高校の時はデートよくしましたよ」

「もてた？」

「もてたわけじゃないですが」

順次は苦笑してから、ためらいがちに答えた。

「ステディがいましたから」

「・・・今は？」

「さあ」

「高校時代の恋人とは？」

「大きな病院の娘（こ）だったんです」

「いいじゃない」

「彼女も医者になるそうです」

「ますます素敵じゃない？」

「ふ」

と、順次が笑った。

「ぼくと付き合っていたせいかな。彼女、横浜（ここ）の医大に合格しなくて。お父さんの同級生が教授をやっているという、地方の『私大』の医学部に行ったんです」

「遠距離恋愛は？」

「・・・彼女をがっかりさせたし」

「え？」

「ぼくは医大を選ばなかった・・・」

「そう。それも愛情表現よね。でも、理系のエリートなら申し分ないでしょう」

「いいんですよ」

順次の口調が強くなった。

「終わったことですから」

「つまらないこと言ったね。ごめん」

麗子は、すこしまずくなるのを覚えた。

妙な「詮索」と思ったろうな。

そう思って、自分自身の心がいたんだ。

## 第一章 赤い目 (7)

---

「この埠頭、夜明けが『とってもキレイ』なんですよ」  
順次が唐突に言った。

「そう・・・」  
麗子は少し戸惑った。

「合コン流れでね、あぶれた連中で、夜中にはいりこんじゃったことがあるんです」

「順次くんでも、そんなことあるんだ」

「けっこう、『やんちゃ』もやりますよ。

真っ暗な海に点々と光るひかりが、にじんだみたいになって、海がねブドウのような紫色になるんです。空は、白と淡いピンクに染められて・・・」

「きれいでしょうね」

「・・・」  
無言になった順次の中に、「思いつめた」ような気配が生じるのを、麗子は感じた。

「見せてあげたい、とっていました」

麗子の方を見た順次が、案外に「ゆっくり」した口調で言った。

「無理だわ」

「・・・」

「なぜですか？」

「人妻よ」

麗子は「必死」にほこりを取り戻そうとした。

けれど・・・

麗子は、抱き寄せられてしまっていた。

「いや」

と、言いかけた唇がふさがれた。

強い力で、舌が吸われ、からめとられていた。



長いキスになった。

いつの間にか順次の手が、堅い下着に触れられようとしているのに気付いた。さすがに麗子は、身をよじてそれを避けようとした。

唇をはずした。

「だめよ」

そう、いいかけた麗子の目が、「好奇心」でこちらをうかがっている「視線」と出会った。

手すりにもたれるように「ホームレス風」の、男の目があった。

赤くただれた目が、好奇に光りながら、こちらを見ていた。男が、薄く笑いかけたような気がした。

麗子は、思わず目をつむった。

順次の胸に顔をうずめていた。

甘やかな喜びが、ひろがっていくのを、麗子は体に覚えた。

## 第二章 パヒューム(1)

---

麗子が、順次を「男」として意識しはじめたのは、「夫」との夫婦喧嘩が、きっかけだった。

「夫婦の喧嘩」

は、珍しくないだろう。

「教育のこと」「実家のこと」

たわいもないことから「喧嘩」になってしまうことがある。

だが「片親」で育ち、苦学して外国語系の大学を出、起業した夫は、それだけにひどく「人を従わせよう」とする、傾向がある。

「お嬢さま」育ちの麗子には、理解しにくい「カンの虫」のようなものがある。

ときどきそれを「逆撫」することがあるらしい。

付き合っていたときには、完全な「紳士」を演じて、そんな「素振り」さえ見せなかった夫だが・・・

腹を立てると、麗子に手をあげることがある。

・・・由真がいなかったら、とっくに離婚していたかも知れない。

何度か「離婚」を決意しかけたことがあったが、そのたびに夫がそれとなく「詫び」をいれてきた。

愛娘（まなむすめ）を、「片親にさせたくない」という思いは、麗子も同じだが、自分が早くに母を亡くしているだけに、夫の方により強いようである。

## 第二章 パヒューム(2)

---

順次が「家庭教師」を始めてからも、夫に強く「たたかれた」ことがある。

目じりに出来た「痣（あざ）」を隠すために、麗子は、サングラスをかけて、順次を迎えた。

次の週、家庭教師に来た順次に、小さな紙のバッグを渡された。

「あら？何かしら」

声が弾んだ。

バッグの中には、丁寧にパッケージングされた小箱がはいっていた。資生堂の「モア」という香水だった。

小さなカードが添えられ、それには、

「香水は、『周囲の人を香りで楽しませてください』という意味で、一番無難な贈り物のひとつだそうです」

と、記（しる）されていた。

夫との「いざかい」は、自然に消えていった。

麗子に対する順次の「思慕」を、夫は夫なりに察したらしい。

ライバルがあらわれれば、男は女を護ろうとするものだ。夫の麗子に対するふるまいに、付き合っていた当時の「紳士的な優しさ」が、少し戻った。

順次は、週に一度の家庭教師が終了すると、夫が帰宅していると、夫に誘われるカタチで、食事をしていくことが多い。

「痣」が消えた日の夜・・・

麗子は、順次を外に食事に誘った。

その日は、夫はKL（クアラルンプール）の出張から、遅く帰宅する予定になっていた。

夫との共通の友人である、加穂が、夜、「飲み」に訪れてくることにもなっていた。

少し「華やいだ夜」にしたかった。

食事の後、「ジャンバラヤ」というウェスタン調のバーに、順次を連れて行った。

ウェスタンギターを弾く夫とボーカルをやっていたという「モダン」な老夫婦が経営している店である。

夫とも、ときどき連れだっていく。フォアローゼズ・シングルモルトをキープしている。

夫はバーボンを好む。

麗子も、結婚するまでは、ビールかワイン、カクテルくらいを「お付き合い」で嗜む程度だったが、今では「強烈な中にもトロリとしたコクと独特の風味のある」その酒を好むようになっていた。

加穂はすでに、ジャンバラヤのカウンターで待っていた。

夫とも打ち合わせて、家に寄らずに店にやってくるようになっていた。

## 第二章 パヒューム(3)

---

順次には、そのことはもう話してあった。

加穂と順次は、麗子の家で一度顔を合わせていた。

その時、

「ちょっと可愛い子じゃない？」

と、浮気性の加穂は、麗子に耳打ちした。

加穂は、麗子と同じ学校の出身である。

学生時代は、地味で暗い雰囲気の中の少女だったが、整形を受けてから性格も、派手でにぎやかになった。

順次にはすでに、加穂が「整形美人」であることを洩（も）らしてしまっている。「もともと顔立ちはよかったんだけど、鼻のカタチがあまりよくなかったの。少し整えただけで、見違えるように綺麗になったのよ」

なぜそんなことを「話した」のか、麗子自身にも分らなかった。

順次には、ただ「興味のない話題なのだ」ということは、表情で察せられた。

そのとき、

「あたしも整形しようかな？」

と、加えると、急に順次の顔が怖くなった。

「そんな必要ないじゃないですか？」

「・・・皺（しわ）がね」

順次の真剣な物言いをかわすように、せいっぱいおどけた口調で加えた。

「増えてきちゃった。皺をとる手術は、割合簡単らしいの」

順次は目を丸くして、無言のまま麗子をみつめていた。

ただだまって、首を横に振った。

その表情は、麗子の胸を熱くしてくれた。

## 第二章 パヒューム(4)

---

順次を連れていくことは、加穂には伝えていなかったの、加穂は驚いた表情を見せた。

「ジャンバラヤ」のカウンターで、麗子をはさんで、加穂と、順次が座るカッコウになった。

「ジャンバラヤ」は、割合広い店で、カウンターが「Uの字」を描くようにつくられている。「Uの字」の反対側には、常連の市会議員と取り巻きの商店会の人たちが幾人が陣取っていた。

順次とのカップルは、周囲の注目を浴びた。

カウンターの下で・・・

並んだ順次の足を、見えぬように麗子は軽く踏んでいた。

表面的には、

「家庭教師の先生よ」

と、紹介したが、飲むうちに、二人の間にただようものは、周囲を感染させていった。

加穂は、最初は順次に何度も、話かけようとしたが、生返事ばかりしか返ってこないのに、少し「退屈」したのか、一時間ほどで帰っていった。

店のママは、

「今日のご主人は？仲のよいご夫婦だものね」

と、念を押すように幾度か言った。

「主人も後でこの店に来るわ」

・・・そう答えた麗子だが、夫は、今日は帰宅しないのではないかと予感があった。

麗子の夫の「今日帰る」は、あまり「あて」にならない。

急の接待や商談がはいったときなど、数日遅れる時もある。

それを「丁寧」に連絡してくる夫ではない。

新婚当時は、心配もしたが、今では「慣れっこ」になってしまっている。

## 第二章 パヒューム(5)

---

「仲がいいといっても、旦那しょちゅう海外だろう？」

市議員がカウンター越しに声をかけてきた。

露悪な言い方を「好む」この市議員を、麗子は「嫌い」だった。

「向こうで何をしているかわからないぜ」

「それは、詮索しないわ」

「・・・こっこの二人にも何かありそうだなあ」

「・・・」

「仲がいいね」

マスターが「注意した方がいいよ」という意味をこめてだろう、微笑して言った。

「・・・弟みたいなものよ。この間は、香水をくれたの」

「それは、うれしいわね」

ママが、少し心配そうな笑みを送ってきた。

「その香りなのね？いつもはディオールでしょう？」

「ええ・・・」

「若々しい香りだな、って思ったのよ」

「・・・香水は周囲を楽しませるため。そうよね」

「・・・はい」

ひどく寡黙になっていた順次が、やっとそれだけ答えた。

酔いが回るうちに麗子は順次に自然に体をよせるようなカタチになっていった。

「やっぱり二人には何かあるな」

市議員が、突然大きな声で言った。

麗子は少し順次から離れた。

「・・・この子、目が悪いのよ。小皺が見えないのよ」

「コンタクトしていますよ・・・」

小さく順次がこたえた。

麗子はカウンターに、半分顔を伏せるようにした。

「あたしでいいの？」

思わぬ言葉が、喉の奥から出ていた。



### 第三章 眠れぬ夜(1)

---

「旦那は東南アジアに出張が多いしな。坊や『病氣』には、気をつけないといけないぜ」  
市議員が、ことさら大きな声で言った。

それまで感情のありようが分らなかった順次に、「怒り」が生まれたのを、麗子は感じた。

「健康チェックの方法知っていますか？」

順次は、市議員に向かって、底冷えする響きのある声で言った。

「・・・」

思わぬ反撃に、市議員にたじろぐ気配が生まれた。

「ママ、ロックを作って」

と、初めて順次が、自分で注文をした。

「ええ」

ママは戸惑ったように、麗子をみた。

麗子は、かすかにうなずいてみせた。

「何するのかな？」

ちょっと「好奇心」がわいた。

順次は、自分の前におかれたグラスを、麗子の方にすべらせた。

「その氷、かみくだけますか？」

と、順次は訊いた。

「え、ええ...

歯には自信があるの」

麗子は順次の言葉に従って、比較的小さな氷を口に含んだ。

透明度の高いその個体は、麗子の口の中をしびれさせた。しばらく舌の上で転がしてみたが、噛みくだけそうになかった。

はしたないな。

と、思いながら一度それをグラスに戻した。

「つめた〜い」

そう言ってから、もう一度、氷を口に含んだ。

歯に力をいれると、ガリッと音がして、それがぐだけた。

### 第三章 眠れぬ夜(2)

---

「呑みこんじゃだめですよ。もう一度グラスに戻して」

麗子は恥じらいを感じながらも、順次の言葉にしたがった。

順次は、半分溶けた氷がグラスに戻されると、それを手にして、一気に飲み干してしまった。

「あ」

叫びにならない小さな「叫び」が、麗子の喉から生まれた。

一瞬、店が鎮まり返った。

「帰りましょうか？」

麗子は順次を促して立ちあがった。

「泊めるの？」

市議員が訊いた。

「酔っているもの。うちにも一人くらいお客を泊めるスペースは、あります」

市議員は、少し口を尖らせて、何か続けようとしたが、そのままやめた。

勘定をすませて店を出ようとするとき、

「ヒュイ」

小さな冷やかしの声が、麗子の耳に届いた。

横目で見ると、若いカップルが、蔑（さげす）むような視線でこちらを見ていた。

麗子は、その視線に、むしろ「体が溶けて行ってしまおうような」歓びを感じていた。

### 第三章 眠れぬ夜(3)

---

「ジャンバラヤ」から、家までのわずかな「距離」、麗子と順次は「恋人同士」の時間を過ごしたかも知れない。

だが、玄関口をはいるとすぐに、由真が飛び出してきた。

「遅いから心配しちゃった」

「あ！ずいぶんまたしちゃったね」

順次の方がすぐに、「家庭教師」の顔に戻った。

「お母さん、お父さんは」

「・・・それがお店にこなかったのよ」

「また、帰ってくるの遅くなるのかも知れないね」

「ええ。お仕事が長びいているのじゃない？」

麗子も「母親」の顔に戻っていた。

「いつもね」

由真がさみしそうな顔をした。

「でも、今日は先生とまってくれるのでしょうか？」

「そのつもりだよ」

「うれしいな」

「勉強する？」

「それはいやだ～」

「じゃあ、眠くなるまでお話しよう」

「うん」

麗子は、リビングの「ソファベッド」を用意してから、化粧を落とした後ベッドにはいった。

「酔っているのに」麗子はその晩眠ることが出来なかった。

かすかな期待と不安を抱えたまま、目をあけていた。

順次は、きっと「酔って」眠ってしまったいるだろう、と思いながら。

ポストに新聞の落ちる音を聞いてから、わずかにまどろんだ。

時計を見ると、15分ほどしか経過していなかった。

外が薄明るくなっている。

麗子は着替えをもって、浴室にはいった。

シャワーを浴びて、ジーンズとTシャツに着替えた。

まったく化粧（けわ）わずに、順次からもらった、モアだけを、首筋にわずかにつけた。

### 第三章 眠れぬ夜(4)

---

お客用の「洗面用具」を用意した。

リビングを通過して、玄関先から新聞を取って、夫婦の寝室に戻った。

新聞に見ることもなく目を通してから、ダイニングに立った。

サラダ、ベーコンエッグを作りトーストを焼いた。由真にミルクをいれ、自分と順次の分のコーヒーは「インスタント」をいれた。

由真が起きてきた。

「先生おこしてきて」

「うん。もう起きてるよ。洗面所に案内してあげた」

すぐに順次が「ダイニング」にはいつてきた。

三人でとる「日常的」な朝食。

ただ「夫」の場所だけが、順次にいれかわっている。

なにか「面映ゆい」感じがした。

「よく眠れた？」

「・・・朝、新聞取りにいかれたでしょう？」

「起こしてしまった？」

「いえ」

・・・順次も眠らなかったのだ、と察した。

「今は、ぜんぜんお化粧なしよ。本当の素顔見るのはじめてでしょう？」

「ええ」

「・・・がっかりした？」

「香水はつけてくれているんですね」

「・・・」

「素顔のままが好きですよ」

そう言ってから、

「お化粧してなくてもお母さん美人だよね」

順次は、由真に同意をもとめた。

「うん。由真のお母さんだもん」

「由真ちゃんも美人だもんね」

「うん。うん」

由真はうれしそうに笑った。

・・・由真を学校に送りだしたすぐ後、夫から電話があった。昼までには帰るという、連絡だった。

その日は、順次は、

「大学に行きますね」

と、挨拶をして、麗子の家を辞した。

## 第四章 流れゆく時(1)

---

ドライブから、麗子と順次は、由真の帰ってくる少し前に家に戻った。

・・・由真の勉強している間、麗子は「テレビ」は観ない。

夕食の準備にも少し早かった。

夫が、順次と顔を合わせるのを好まなくなり、「家庭教師」のある日は、決まって遅く帰宅するようになった。

順次も、麗子の家では、夕食をとらなくなった。

麗子は「キルティング」を始めた。

頭の中を「さまざま」な思いが過ぎっていった。

夫との結婚生活。。。

新婚旅行で行ったヨーロッパのこと。夫の仕事も兼ねてのことだが、由真がまだ学校に上がる前に家族で訪れた、東南アジアの国々。

そしていつともなく去っていく日々。

ぬくもり。痛み。悲しみ。怒り。絶望。

「不幸」

そして・・・時折、おとずれる「やすらぎ」と「幸せ」

待っている時間。

長い長い待っている時間。

夫を待つ時間。

由真を待つ時間。

順次。

順次を待っている時間・・・



麗子は「キルティング」の手をとめた。

ふと、少女時代を思い出した。

あの頃、ひどく「死」を怖れていたのだ。

今はすでに亡くなった父に、

「どうして『死』が、人間にあるの？」

そう、むしゃぶりついても訊いてみたい衝動にかられたことが、幾度もあった。

今は・・・

生きているのに「せいっぱい」で、死のことなどは、頭がない。

死に遠い幼い日にはそれを恐れ、そこに近づいている今は、それを忘れている・・・

死を怖れていた「幼い頃」より、確実に「衰えて」いるだろう、自分の「体」を、麗子は思った。

## 第四章 流れゆく時(2)

---

麗子は、時計をみやった。

もう順次の「家庭教師」が、終了する時間に近い。

麗子は立って、お茶を淹（い）れ、「茶うけ」に到来物の「羊羹（ようかん）」を切った。

けれど、家庭教師を了（お）えた順次は、

「少し急ぎますので」

と、言ってすぐに帰って行ってしまった。

「また、連絡しますね」

そう、言い残した。

夫が必要だ。

唐突に、麗子はそう思った。

その夜、夫の帰りは遅かった。

数日前、

「もう、順次と寝たのか？」

と、夫に訊かれたことがある。

おそらく「ジャンバラヤ」にいた「市会議員」か、その取り巻きのひとりが、親切めかして「気をつけたほうがいい」くらいの忠告をしたのだろう。

麗子が気色ばんで否定すると、夫は、不快な表情を見せたが、それ以上には深く「追求」はしてこなかった。

その夜、夫は麗子をもとめてきた。

夫の顔、手、足。

それはいかにも麗子に「親しい」ものだった。

夫は、いつもより少し長めに愛撫をし、何も言わずに麗子につないだ。

・・・慣れた「歓び」があった。

夜中に、麗子は「ふ」と目をさました。

夫の軽い「いびき」が響いていた。

「疲れて」いるのか、最近夫は、いびきをかくことが多くなった。

麗子は、しばらくベッドの中で目をあけていた。

それから、リビングに行き、濡れ縁から庭に出た。

霧の中に、常夜灯の光がポーとした光を放っていた。

蛾が、数匹、光のそばでパタパタと小さな音を立てて、はばたいていた。

麗子は、体の中をジーンと貫く、何かを覚えた。痛みと歓びと、哀しみと「期待」を伴う感覚だった。

「順次」

心の中で、そう呼んでみた。

「は」と気づいた。

「あたしでいいの？」

「新車に乗ってほしい」

と、いわれたときに、軽口で言った言葉にではなく、

「ジャンバラヤ」

で、麗子が「半分顔を伏せ」ながら、喉の奥から絞り出すように「言ってしまった」

「あたしでいいの？」

という言葉に、順次は答えてくれたのかも知れない。

と・・・

いつの間にか、涙ぐんでいる自分に気付いた。

ポツリと、水滴が落ちてきて、ほてった麗子の体を軽くたたいた。  
水滴はすぐに、サーッという音を立てはじめ本格的な「雨」になった。

ふと家族で旅行したシンガポールの街を洗う「スコール」の激しい雨の光景が胸を過（よ）ぎ  
った。。

「これから『雨季（レイニィ・シーズン）』になるのだわ」  
と、麗子は思った。

（終わり）